研究ノート

不登校を経験した子どもがフリースクールでパワーを回復するプロセス

鈴木　依子[1)]，大達　朱理[2)]

The process of regaining power in a free school for children who have experienced truancy

Yoriko Suzuki and Akari Oodachi

本研究の目的は，フリースクールに通う子どもが，新しい環境の下で，不登校で失ったパワーを回復していくプロセスを明らかにすることである。フリースクールに通う小学生・中学生 38 名にインタビュー調査を実施し，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。その結果，３つのコアカテゴリーと，６つのサブカテゴリーが生成された。子どもたちはフリースクールへの評価を通して，そこでの主体的な実践から，安心して自分らしく生活できる関係を形成し，失われたパワーの回復を図っていることがわかった。フリースクールに通う子どもが，新しい環境の下で，不登校で失ったパワーを回復していくプロセスは，《個人のステージでのパワーの回復》《対人関係のステージでのパワーの回復》《環境のステージでのパワーの回復》という３のステージのコアカテゴリーから成り立っていた。それぞれのステージでは，不登校を経験した子どもたちは，〈パワーの回復のきっかけとなるフリースクールに対する評価（認識）〉に対して，〈パワーを回復するための対応（取り組み）〉を行っていた。

キーワード：フリースクール，不登校，パワーの回復，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

Ⅰ．はじめに

文部科学省は，年間30日以上欠席した児童生徒の場合を「長期欠席」とし，「不登校」とはその長期欠席者のうち，「何らかの心理的，情緒的，身体的あるいは社会的要因・背景により，登校しないあるいはしたくともできない状況にある者で，そのうち病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義している。

令和４年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」[1)]では，小学校及び中学校における不登校児童生徒数は 299,048 人（前年度 244,940 人）であり前年度から 54,108 人（22.1%）増加し過去最多となった。そして，90 日以上の不登校であるにも関わらず，学校内外の専門機関等で相談・指導を受けられない小・中学生が 4.6 万人に上ることが明らかとなり，生徒指導上の喫緊の課題となっている。

こうした状況を踏まえて，文部科学省では「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」（COCOLO プラン）[2)]が 2023 年３月 31 日に取りまとめられた。永岡文部科学大臣は，大臣メッセージ[3)]で，「今回のプランを実現するためには，行政だけでなく，学校，地域社会，各ご家庭，NPO，フリースクール関係者等が相互に理解や連携をしながら，子どもたちのためにそれぞれの持ち場で取組を進めることが必要だ」と述べている。

また，COCOLO プラン[2)]は不登校により学びにアクセスできない子供たちをゼロにすることを目指した内容となっており，不登校特例校の設置や教育支援センターの支援機能強化には，NPO やフリースクール等との連携を強化することも効果的であると述べられており，フリースクールのこれまで不登校教育の実績を評価したものと理解できる。

宮良ら[4)]によると，「フリースクールは不登校の子どもの居場所を作るというニーズに応じて作られており，通常の学校に行っていない小学校・中学校・高校の年齢の子どもを対象に，学校のある時間に学校教育の枠に捉われないオルタナティブな教育活動を行っている施設」と定義されている。フリースクールは学校のように制度や法律で規定されているものではないため，共通のプログラムが存在しているわけではない。勉強を主とする団体もあれば，集団生活に慣れることを目的とする団体，遊ぶことを通して社会に必要な人間性を養うことを目的とする団体など，目的・目標とするものはフリースクールによって全く異なる。そのため，児童生徒が自分に合っ

1）京都女子大学発達教育学部　教育学科　養護・福祉教育学専攻
2）特定非営利活動法人ここ

た団体を見つけることができることも特徴といえる。

田中[5]は，フリースクールの目的について子どもたちの自主性，主体性を尊重するということ，すなわち，学習の内容，方法を自由にするということであり，一人ひとりの子どもたちが新しい事柄を創造できる力をつけることであると述べている。

フリースクールに通う子どもたちは不登校を経験している。不登校になった子どもたちの多くは，偏見，差別，阻害といった状態に陥いることとなる。深い孤独を経験し，生きる力を奪われたりと，パワーレスの状態にあるといえる。不登校により，社会から疎外され，抑圧され，力を奪われた彼らが，再び教育の場であるフリースクールに通い，次第に落ち着くことは経験的には知られている。

しかし，不登校を経験した子どもたちが，新しい環境の中で自分の生活を作っていくプロセスは明らかとなっていないのではないかと考えた。学校での生活にはなじめなかった子どもが，順調にフリースクールに適応していく場合，なぜそうなのかを考え，子どもの立場からそのプロセスを明らかにすることは援助的にも意義があると考えた。

そこで本研究では，不登校を経験した子どもが，どのようにしてフリースクールに慣れていくのかを明らかにするために，1つの図式を提示し，援助の視点を得ることを目的とした。

II．研究方法

1. 対象者とデータ収集方法

O府のフリースクールに通う義務教育期間中の38名にインタビューを行った。対象者の内訳は，小学生が20名で女性が6名，男性が14名である。中学生は18名で，女性が8名で，男性が10名である。

調査は，令和4年7月1日から7月31日までに実施した。データ収集は，回答者へのインタビュー形式でプライバシーが守られるように配慮した。その際，本人の了承を得て会話内容を録音し，インタビュー後に逐語記録に書き起こした。インタビューは，Cフリースクールの職員の協力を得て実施した。

インタビューは半構造化面接で，インタビューの主な項目は「学校とフリースクールの違い」「フリースクールに通ってよかったこと」「フリースクールで自分が経験したこと」などについてたずねた。

2. 分析方法

本研究は，不登校を経験した子どもが，フリースクールでの生活を通して認識した経験から，自らのパワーを回復していくための対応という，人と環境の相互作用に関する研究であることから，人間行動力の説明と予測に優れた分析方法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTA）[6)-7)]による分析を用いることとした。

M-GTAにおける分析焦点者は「不登校を経験したことのあるフリースクールに通う子ども」とし，分析テーマは「不登校を経験した子どもがフリースクールでパワーを回復していくプロセス」とした。

分析焦点者と分析テーマを設定した後，分析テーマに沿って概念を生成した。次にその概念の有効性を十分認識したうえで，それらの概念間の関連性を見比べながら関係を考察し，それをもとにカテゴリーとサブカテゴリーの生成を行い，結果図とストーリーラインの作成を行った。その後理論的飽和に至った。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮としては，まず，対象者が通うフリースクールの理事長に，研究の主旨を文書と口頭で説明し，研究以外の目的でデータを使用しないこと，回収したデータは個人が特定されないように配慮することを伝え許可を得た。そのうえで，対象者にも同様の内容を伝え，その場で理解・協力の得られた児童生徒にインタビューを実施した。また，対象者となる個人の人権擁護のため，記録されたデータは，研究者の責任で厳重に保管・管理を行った。

III．結果

1. 全体のストーリーライン

図1の分析より生成された概念をカテゴリー化し，その関係性を図示した結果を示す。

表記は《　》でくくられたものをコアカテゴリー，〈　〉をサブカテゴリー，【　】を概念で示す。

データを分析した結果，中心となるコアカテゴリーは，《パワーの回復》で，「自分が人生の主人公となれるように力をつけて，自分自身の生活や環境をコントロールできるようになること」と定義する。

フリースクールに通う子どもが，新しい環境の下で，不登校で失ったパワーを回復していくプロセスは，《個人のステージでのパワーの回復》《対人関係のステージでのパワーの回復》《環境のステージでのパワーの回復》という3のステージのコアカテゴリーから成り立っている。

それぞれのステージでは，不登校を経験した子どもたちは，〈パワーの回復のきっかけとなるフリースクールに

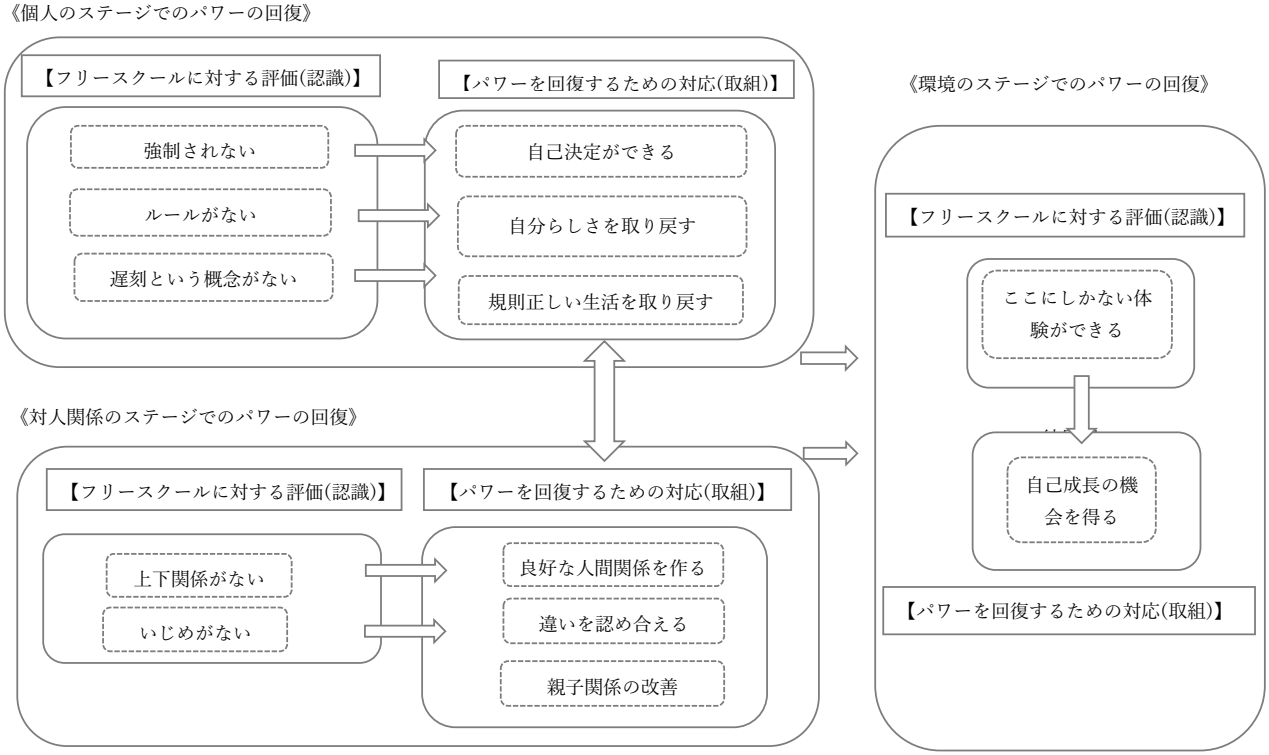

図１　パワー回復のプロセス
《　》＝ コアカテゴリー
【　】＝ サブカテゴリー

対する評価（認識）〉に対して，〈パワーを回復するための対応（取り組み）〉を行っていた。

また，それぞれのステージは，互いに影響を与え合っており，《個人のステージのパワーの回復》と《対人関係のステージのパワーの回復》は，対象者のパワーの回復が進むと安定化し，【親子関係の改善】に向かうことがわかった。

2. 個人のステージでのパワーの回復

個人のステージでの対象者がどのようにフリースクールとの接点を見出し，「パワーの回復」をしたのかを，それぞれの概念と概念間の関係を説明する。

1)「強制されない」と「自己決定ができる」

学校での体験について，「学校では（トイレには）行こうと思えば行けるけど，みんなの前で申告しないとあかん。それでクラスメイトから変な目で見られるのが嫌やし恥ずかしいねん。」と語り，学校でのルールに縛られた生活を窮屈に感じていたことがわかる。

また「学校に行っているときに縛られるのが嫌ってわけではなかった。けど，自由の方がましだなって僕は思う。例えば，図工の時間とかに先生にこうやってこう描きなさいって言われたら，みんなおんなじ作品になるじゃん？じゃなくて，ぐちゃぐちゃにしないでよとかは言ってくれていいけど，自由に描いていいよって言ってほしかった」と学校生活を振り返っている。

学校では，ある程度決められた内容に沿って授業が進められるため，そこから逸脱しかかると，先生に注意されたり，こうしないといけないと強制されることが多い。「強制されると自分らしさがなくなるし，個性も出せへん」と述べているように，子どもたちは，学校への不信感やあきらめの悪循環を繰り返し，パワーレスの状態となっていたといえる。「学校では，毎日何をするか先生に決められているけど，ここ（フリースクール）では自分で何をしたいのか決めることができる」と述べるように，フリースクールでは，「自己決定」をすることで，安心して自分らしく生活できる関係を形成し，失われた「パワーの回復」を図ることができたことがわかる。

2)「ルールがない」と「自分らしさを取り戻す」

フリースクールには，服装や髪型にも規定がなく，ゲーム・switch などの電子機器の持ち込みができる。「ファ

ッションとか，自分の着たい服をいつでも着られるのがいいよな！髪も染められるし，ピアスも開けられるねんで！」「switch持ってこれるのがほんまに嬉しい！学校にはゲーム持ってったらあかんから，初めて会う人にどんな話したらいいか分からへんけど，ここではゲームの話題で盛り上がれる！」など，フリースクールでは，対象者にとっては理不尽なルールに縛られることがなく，「自分らしさを取り戻す」ことにつながっていた。

「ルールがない」という，学校に抱いていた疑問や不自由さから解放されたというフリースクールへの認識は，子どもたちに「自分らしさを取り戻す」という対応をとることを可能とさせ，「パワーの回復」をもたらすこととなった。

3)「遅刻という概念がない」と「規則正しい生活を取り戻す」

対象校は登下校の時間が決まっていない。開校時間はあるが，絶対に開校時間から来なければいけないわけではなく，「遅刻という概念がない。」「学校に行っていた時は結構遅刻してた。」と語る子どもも，「朝が弱いから，朝ゆっくり来てもいいってのは嬉しい。」「今は，登下校時間が決まっていないので，今もまだ，たまにそうなってしまうけど，前よりかは朝起きられるようになった。」と遅刻を注意されることもないため，ストレスを感じることもなく，フリースクールに徐々に登校できるようになったことがわかる。

つまり，開校時間内であれば，何時に来て何時に帰るかを各生徒が自分で決め登校することができる。遅刻したからと言って，理由を聞かれたり，ペナルティが発生することがないため，フリースクールに通うことにプレッシャーがかからないことがわかる。

そして，「ここ来るようになって，外に出るようになった」「体を動かすことで健康になれる」「家の中でぼーとしていたら頭も体も悪くなる」など，それまでの昼夜逆転の生活から，心身の健康維持にも配慮して，「規則正しい生活を取り戻す」ような対応ができるようになったことが理解できる。

3. 対人関係のステージでのパワーの回復

対人関係のステージで対象者がどのようにフリースクールとの接点を見出し，「パワーの回復」をしたのかを，それぞれの概念と概念間の関係を説明する。

1)「上下関係がない」と「良好な人間関係を作る」

フリースクールには，様々な学年の子どもが通うため，「上下関係がない」と子どもたちは認識している。「年上でも〇〇先輩とかじゃなくて友達の感覚でおれる。」というように，上下関係があまりないため，学年や年齢に捉われることがない。また，学校に通っていた時は，「教室の先生の机にはいつもお茶を置いてあるのに，僕たちは置くことも禁止されてる。」など，教員しかお茶が飲めないことへの不平等感があったが，フリースクールではみな平等であり，職員とも対等なパートナーになれるという認識がある。このような，「上下関係がない」という認識は，思ったことを素直に伝え，遠慮しない間柄になるという「良好な人間関係を作る」対応を可能としていた。「ここにきて初めて誰かとマイクラ（switchソフト）をするようになったかな。それまでは一人でやっていたけど，友達とやると楽しい」「他の学年の子たちの話は面白い」「自分の学年の子とは違う感覚がある」「いろんな人と喋って自分の趣味の幅が広がったような気がする」という語りからも，自分1人では気づくことができないことでも，様々な人と関わることで，新しい考え方や価値観を，相手の良いところとして尊重する対応をとることで，パワーの回復につながっていることがわかる。

2)「いじめがない」と「違いを認め合える」

「ここは学校と違っていじめが全くないよな。いじめられてしまって学校に居場所がないと感じている子も中にはおるっていうことを皆分かっているから，いじめは絶対ダメなことっていう認識が強いんやろうね」とフリースクールには「いじめがない」ことを認識している。

以前の学校では人と考えが違うと敵視され，クラス全員で一人を責める構造が出来上がり，いじめに発展することがあった。そうしたことを経験している子どもたちは，いじめは絶対あってはならないという認識である。ただ，「社会に出ると，自分と全く合わない人もたくさんおるけど，フリースクールもそれは一緒。自分が嫌いって思ってる人と適度な距離感で話すって難しいねんな〜。でもその方法を自分で考えていくのも勉強の1つやと思う。」と考え方が違っても，いじめなどに発展しないように配慮することを忘れず，お互いの「違いを認め合える」ような対応を行っている。自身が学校で経験したマイナスの人間関係をもとに，前向きに人とのかかわりを考え対応している姿勢がうかがえる。

4. 環境のステージでのパワーの回復

環境のステージで対象者がどのようにフリースクールとの接点を見出し，「パワーの回復」をしたのかを，それぞれの概念と概念間の関係を説明する。

1)「ここにしかない体験ができる」と「自己成長の機会を得る」

フリースクールには，毎週水・木曜日に１時間開店するカフェでの就労体験がある。「カフェでの体験は将来につながると思う」「お客さんとかと話すことで自分のスキルも上がる」というように，参加している子どもたち自身も，それぞれ成長や喜びを感じることができ，カフェを通して働くことの大変さや達成感などを身を持って体験し，社会に出るために必要な能力を培っているといえる。

また，週末にはカフェの振り返りを参加者全員で行い，他者の良かったところや全体として改善できそうなところなどについて意見を出し合う。「振り返りとかで自分で考える力がついてるなって感じてる」ことは，カフェでの就労体験を通して，自分を磨くことができる「自己成長の機会を得る」ことでパワーの回復につながるといえる。

5. パワーの回復と安定化

対象者は，【規則正しい生活を取り戻し】，【良好な人間関係を形成する】という取り組みが安定化してくると，【親子関係の改善】についても対応が可能となっていた。

「私は学校に行かなくなった時，お母さんが鬱になりかけたことがある。その時は妹も学校に行かへんかったから２倍でしんどい思いをさせてしまった。」「僕の親はちゃんと外に出ていく場所ができたことを嬉しく思ってるそうです。」など，親は，１日中家に引きこもっている子どもを見ると，このままでいいのだろうかと心配になる。周りの家庭と比較して焦りを感じ，子どもに学校に行くよう説得したり，勉強用の教材を買ってきてやるように促したりする親は多い。しかしフリースクールに行くことで子どもの精神状態が安定し，規則正しい生活や良好な人間関係を取り戻し，子どもが元気になると親も安心することができるである。フリースクールは，【親子関係の改善】に貢献していることがわかる。

Ⅳ．考察

1. 個人のステージでのパワーの回復

不登校を経験した子どものパワーの回復について，《個人のステージでのパワーの回復》では，不登校を経験した子どもたちの《パワーの回復のきっかけとなるフリースクールに対する評価（認識）》は，３つの概念から構成されていた。フリースクールでは，【強制されない】【ルールがない】【遅刻という概念がない】と，いずれもこれまで抱いていた学校への疑問や不自由さとは違う経験を認識していた。こうした認識を踏まえて，フリースクールに通う《子どもたちの対応（取り組み）》からは３つの概念が抽出された。１つ目の対応はフリースクールでは強制されることがないため，【自己決定ができる】ことである。２つ目の対応はルールがないことで，【自分らしさを取り戻す】ことができる。３つ目は，フリースクールに定期的に通うことで【規則正しい生活を取り戻す】ことである。

岡安ら[8)-9)]によると，「学業」が「無気力的認知・思考」と高い関連性を持つといわれており，本研究においても，対象者は，強制されたり，ルールに縛られたり，遅刻をして注意をうけることで，抑圧や疎外感を感じ，学業に専念できなくなったと考えられる。

一方フリースクールに対する子どもたちの認識は，これまでの学校での経験と違い，反発感傾向を和らげるものだった。そこで，対象者は，パワーレスの状態から，自らの持っていた可能性や力を発揮することが可能となったといえる。不登校傾向が高いほど，自己意識の肯定性が低いといわれている[10)]ことからも，フリースクールにおける個人のステージでのパワーの回復とは，自己肯定感の獲得と関連していると推察できる。

2. 対人関係のステージでのパワーの回復

《対人関係のステージでのパワーの回復》では，不登校を経験した子どもたちの《パワーの回復のきっかけとなるフリースクールに対する評価（認識）》は，【上下関係がない】【いじめがない】の２つの概念から構成されていた。それに対応する《子どもたちの対応（取り組み）》は，【良好な人間関係の形成】と，お互いの【違いを認め合う】ことで，問題解決に向けた他者と協働する力を身に着ける対応となっている。

学校で適応するためにはそこでの友人関係が良好であることは非常に重要であり[11)]，友人関係が「抑うつ・不安感情」と高い関連性がある[8)-9)]といわれている。伊藤[12)]は，不登校を経験した生徒が，再びチャレンジングスクール等に通い続けた理由として友人の存在を挙げており，本研究においても，フリースクールでの上下関係のない友人との良好な人間関係の形成を通してパワーの回復が図られていることがわかる。

また，伊藤[12)]は学校へ通えなかったことの「痛み」の共有を基盤としながら，他者に嫌な思いをさせないような配慮がある環境が生まれると述べており，対象者もいじめという「痛み」を経験したものとして，お互いの違いを認め合うことが可能となっていることが推察できる。対人関係のステージでのパワーの回復は，仲間意識の獲

得につながっているといえる。

3. 環境のステージでのパワーの回復

《環境のステージでのパワーの回復》では，不登校を経験した子どもたちの《パワーの回復のきっかけとなるフリースクールに対する評価（認識）》は，【ここにしかない経験ができる】であり，それに対応する《子どもたちの対応（取り組み）》は，【自己成長の機会を得る】という対応だった。

学校への反発感情の減少傾向には，授業時間の工夫などが有効な手立てであり，充実感は，生徒の好きなことや楽しいと思えることを積極的に行えるようなかかわりや環境調整をすることが有効と考えられる[13]との報告がある。本研究でも，フリースクールにしかない就労体験を通して，将来の自分の可能性を体験することで，自己成長の機会を得ており，それが充実感を高め，登校嫌悪感を低下させることにつながっていると推察された。

4. パワーの回復と安定化

パワーが回復して安定化すると，親子関係の改善につながることが明らかとなった。宮良ら[4]は，不登校の児童生徒が家庭への居場所感をもつことで，自尊感情が少しずつ回復していくことを明らかにしている。家族が不登校である自分を否定せずに受け入れてくれ，家庭内で存在を認めていることを表現するといった家庭内での支援が不可欠だと述べている。対象者はフリースクールで規則正しい生活を取り戻し，良好な人間関係を形成することで，家庭内での居場所を確保することにつながっていると推察される。

渡邉[14]は，母親の「学校執着放棄」への努力が不登校の良好な予後と関係する可能性について言及しているが，本研究においても，家族がフリースクールに通う子どもを肯定的に受け止め，彼らを見守ることで，不登校の良好な予後につながることが示唆された。

Ⅴ．まとめ

本研究は，フリースクールという環境への認識と，それに対して子どもたちがどのような対応を行ったのかに焦点を当てることで，不登校を経験した子どもがフリースクールでパワーの回復をするプロセスの解明を行った。

ただ，本研究は限定されたフリースクールに通う38名の子どもを対象としたもので，知見の普遍化に関しては限界がある。

また，今回の研究では取り上げなかったが，フリースクールに通う子どもたちは，パワーの回復とともに，「周囲のフリースクールへの理解のなさ」や，「学校復帰の難しさ」など，様々な悩みを抱えながら生活していることにも言及しており，今後はこうしたフリースクールに通う子どもたちの抱える悩みについて，彼らがどのように取り組んでいるのかについても検討していく必要性がある。

謝　辞

本研究を行うにあたり，調査にご協力いただきましたフリースクールの皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

1） 文部科学省：令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要（https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_2.pdf）（2023）
2） 文部科学省：「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策について（通知）」（https://www.mext.go.jp/content/20230418-mxt_jidou02-000028870_aa.pdf）（2023）
3） 文部科学省：「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLO プラン）」（https://www.mext.go.jp/content/20230418-mxt_jidou02-000028870_cc.pdf）（2023）
4） 宮良淳子，柴裕子，市江和子：不登校からフリースクールを経て再登校を決めた経験者の心理的プロセス．日本看護研究学会，45(2)：327–338（2022）
5） 田中圭治郎：フリースクールの課題と学校の役割．教育学部論集，13：85–100（2002）
6） 木下康仁：グラウンデット・セオリー・アプローチ；質的実証研究の再生．弘文堂，東京（1999）
7） 木下康仁：質的研究法としてのグラウンデット・セオリー・アプローチ．コミュニティー心理学研究，5: 49–69（2001）
8） 岡安孝弘，嶋田洋徳，丹羽洋子，森俊夫，矢富直美：中学生の学校ストレッサーの評価とストレス反応との関係．心理学研究，63(5)，310–318（1992）
9） 岡安孝弘，嶋田洋徳，坂野雄二：中学生用ストレス反応尺度作成の試み．早稲田大学人間科学研究，5(1)，23–29（1992）
10） 松井賢二：中学生の不登校意識－学校ストレス，進路（キャリア）成熟，自己肯定感との関係から―，新潟大学教育人間科学部紀要（人文・社会科学編），5(1) 251–258（2002）
11） 本田周二：友人関係における動機づけと友人とのコ

ミュニケーションおよび精神的健康との関連．人間生活文化研究，26 572–581（2016）
12）伊藤秀樹：不登校経験者への登校支援とその課題―チャレンジングスクール，高等専修学校の事例から―．教育社会学研究，84 207–225（2009）
13）地井和也：中学生の登校回避感情と自己肯定意識の関連についての調査．学習院大学人文科学研究所，人文 (9)，63–72（2011）
14）渡邉淳一・夏野良司・古川雅文・佐藤修策・濵名昭子・辻河昌登：不登校の予後の規定要因－オープンシステムの親の会における調査を通して．生徒指導研究，9 58–68（1998）